蘆花浅水荘

ろかせんすいそう

滋賀県大津市

書院から望む庭園

この別荘庭園は、山元春挙が故郷　膳所に、自分の画の師　森寛斎と両親の恩を記す持仏堂を建立するとともに、自身のアトリエを造るために建築したものであり、離れ、土蔵、持仏堂、本屋など六棟の建造物が存在する。邸宅となる本屋は、数寄屋造りを基調とし茶室を点在させ、春挙の意図によりそれぞれ異なった意匠でまとめられている。１階は住居、２階は応接間とアトリエからなる。屋根は寄棟造、檜皮葺である。

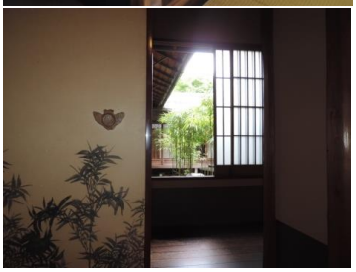
【残月の間】天井と障子の腰板に網代を施している。残月の間の襖の引き手は正に残月を表す。書院の引き手は満月、続く仏間は半月、と、月の満ち欠けを引き手で表現している。

見どころ

蘆花浅水荘（ろかせんすいそう）は、日本画家山元春挙（やまもとしゅんきょ）の別荘で、春挙自らが設計・監修を手掛け、京都の大工　橋本嘉三郎と共に７年の歳月をかけて建築した邸宅である。画家であり、山を愛する登山家であり、書や詩にも精通する粋人春挙がその洗練された感性をもって建築した蘆花浅水荘は、意匠的、技術的に趣向が凝らされているが、華美でなく計算された機能美と気品さえ感じられる。また、庭園は琵琶湖及び近江富士と称される三上山を借景し、数寄屋建築の粋を存分に堪能できる。

【２階応接室】山元家の家紋である「ききょう」が家具、天井換気口、シャンデリアにあしらわれている。

庭園から見た邸宅



【竹の間】床の間の室礼も全て竹という徹底ぶり。襖には春挙松が描かれ、引き手は竹製で雀が飛び立つ様子を表現。丸窓には竹を嵌めこみ障子越しに満月とススキを表現する粋な趣向。

大正時代の雰囲気漂う、静かで落ち着いた魅力的な和の空間。
近代建築の違例として国の重要文化財に指定された蘆花浅水荘は地域の人々にその価値を理解され、コミュニティの場としても大いに活用されている。

【莎香亭】松の唐紙に千鳥の引き手。楽しく舞う様子を高さを変えて表現する粋な遊び心。春挙が瞑想に耽った小部屋には梅が描かれている。

建物名称	蘆花浅水荘
建築年	1914年～1921年（大正3年～10年）
構造・様式	木造2階建て・数寄屋造
所在地	大津市中庄1丁目19番地23号
電　話	077-522-2183
Ｈ　Ｐ	www001.upp.so-net.ne.jp/rokasensuisou/top.htm
開館時間	10：00～16：00　（要予約）
アクセス	京阪電車石山坂本線瓦ヶ浜下車　徒歩5分
備　考	国の重要文化財　大津市指定文化財 名勝

居初氏庭園と天然図画亭

いそめしていえんとてんねんずえてい

滋賀県大津市

居初氏庭園と天然図画亭

居初氏庭園と天然図画亭は、天和元年（1681年）頃に、千利休の孫にあたる千宗旦の門人、藤村庸軒（ふじむらようけん）と、庸軒の門人で堅田郷士の一人である北村幽安（きたむらゆうあん）との合作により作庭されたと伝えられている。

【居初氏庭園（いそめしていえん）】

広さは２０８坪。門を入ると霰敷を矩形に打ち、直線を強調した敷石が湖岸壁まで続く。その先には、サツキの大刈込が琵琶湖を背景に迎えてくれる。茶室の縁先へ導くように途中から直角に右に曲がる霰敷石。先には、袈裟型手水鉢が鎮座する。全庭を覆う杉苔、形よく手入れされた松やツツジ、飛石、置き石の配置が絶妙であり、東面に広がる雄大な琵琶湖と湖東の山々を借景する庭園は滋賀ならではの天然図画である。

琵琶湖の青、ツツジの紅、松の緑といったコントラストが庭園美を一層引き立てる。

縁先の手水鉢

見どころ

琵琶湖の湖上特権を掌握し、堅田の三豪族として代々大庄屋を勤めてきた居初家。その屋敷内に広がる居初氏庭園。琵琶湖や対岸の近江富士と称される三上山を借景とする枯山水庭園は、国指定の名勝である。その庭園内に建てられた茶室が、天然図画亭（てんねんずえてい）である。その茶室から望む庭園の光景は、茶室の陰と相まって自然の美しさがさらに際立ち嘆息する。まさに、天然図画である。心静かに四季折々の繊細な美しさを堪能できる魅力的な和の空間である。茶室は県指定重要文化財であり、茶室越しに庭園を眺めるための工夫が随所に見られる。

茶室越しに眺める庭園

廻り縁のある天然図画亭

【天然図画亭（てんねんずえてい）】

天然図画亭の名は天台の学僧　六如上人（りくにょしょうにん）が名付けたとされている。葭葺入母屋造、柿葺庇、平入り。玄関３畳、中の間４畳半（本勝手の茶室）、これに続く仏間６畳、主室は８畳と１畳の点前畳。玄関と主室には腰高障子を入れており、腰板には、海北友松（かいほうゆうしょう）作と伝わる花鳥が描かれている。点前座は向切、逆勝手で、中央に中柱を立て結界を作り遊具を客人に見せびらかさない謙虚な気持ちを表している。また、縁先には、秀吉の御座船にヒントを得た板蔀の仕掛けや、出庇、腰高障子は、茶室越しに眺める庭園を図画のように見せるための演出である。

建物名称	居初氏庭園と天然図画亭
建築年	1681年（天和元年）
構造・様式	葭葺入母屋造
所在地	大津市堅田2丁目12番5号
電　話	077-572-0708
開館時間	9：00～16：30　日曜10：00～15：00 （要事前予約）
アクセス	JR湖西線堅田駅　徒歩15分
備　考	国指定名勝　滋賀県指定文化財

外村宇兵衛邸（てんびんの里　伝統家屋博物館）

とのむらうへいてい

滋賀県東近江市

主屋表門

外村宇兵衛邸は、五個荘商人を代表する商家として隆盛をきわめた。現存する主屋は、１８６０年（萬延元年）に京都の大工西村冨次朗・川瀬忠次郎によって建築された。２，７２３㎡の敷地に、家業の隆盛と共に数次にわたる新増築が重ねられ、盛時には十数棟が立ち並ぶ壮観なものであったが、現存されているのは、その半数程となった。しかし、五個荘商人の本宅の典型を示すものとして、保存整備計画工事が計画され、往時の姿に復元し、平成６年より伝統家屋博物館として一般公開されている。主屋は中央部が二階建て、北部と北西部が平屋になっていて土蔵に接続している。主屋の背面には「オクニワ」に続いて平屋のミズヤ棟が建ち、主屋の前面には南側の道路に沿って便所、表門、カワトが続いている。

川戸（カワト）

敷地の周囲を流れる水路の水を敷地内に取り入れ、炊事等の日常生活に利用するところ。鯉が育てられていた。

見どころ

五個荘町は、近代日本経済の基礎を築いた近江商人の発祥の地の１つとして知られ、優れた歴史的な町並みが多く残っている地域である。古代の条里制の区画を継承する農地と浄土真宗の寺院と鎮守の杜を核とした湖東平野の典型的景観を形成している。国の伝統的建造物群保存地域にも指定されている。現在も本宅として居住・管理されているものは多く、商人屋敷も公開されている所が５ヶ所ある。単体の建物見学に留まらず集落としての空間構成が味わえる。水路・白漆喰・板張り・宅地内の庭木等が美しい景観を生んでいるが、板張りには琵琶湖で使用済みになった舟板が利用され、趣を醸し出している。あつい信仰心をもって、「生業と菩薩の業」を忠実に行動にうつし、「先義後利」の精神での商いが、今広く知られている　「三方よし」に繋がっている。

主と客と継承者しか上がれない２階階段に設置されている可動床板収納

取替可能な敷居と中継ぎの畳

主屋二階の座敷

近江商人は他国で店を出した後も出身地に居宅を持ち、妻や子供たちが中心となって留守宅を守った。それが「本宅」である。
商人たちの生活は華美ではなく堅実なものであったが、庭園や茶室を持ち、文化的な質の高さがうかがえる住まいとなっている。また本宅は客を迎える場であり、妻による丁稚たちの育成の場であった。近江商人の妻の教養は重要な役割を担っていた。

旧外村宇兵衛邸保存整備事業報告書
東近江市五個荘金堂伝統的建造物群保存地区保存計画　　参照

敷地東部（川戸）側の町並み

建物名称	外村宇兵衛邸
建築年	1860年（萬延元年）
構造・様式	木造2階建て・瓦葺
所在地	東近江市五個荘金堂町645番地
電　話	0748-48-5557
開館時間	９：00～16：30 月曜日・祝日の翌日・年末年始　休館
アクセス	JR琵琶湖線　能登川駅から「近江鉄道バス神崎線」 ぷらざ三方よし前下車　徒歩5分
備　考	市文化財史跡指定

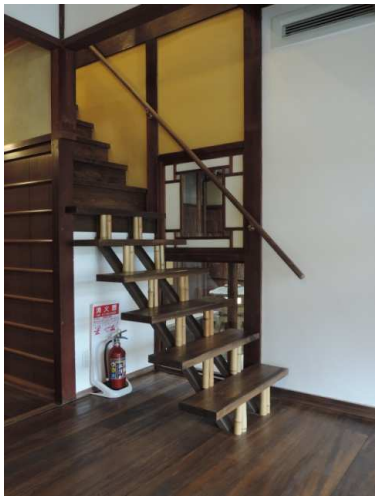
大津町家の宿　粋世

おおつまちやのやど　いなせ

滋賀県大津市

大津町家の宿　粋世

改修中にトタンを剥がしたところ現れた黒壁を基に、黒大津壁を復元した外壁。白漆喰の虫子窓も手を加え復元されている。内部の階段壁は、既存壁に合わせて、黄大津壁、浅黄大津壁で仕上げられ、大津町家の特色が伺える。改修計画により、逆勝手に掛け替えられた階段からは、中庭を望めるようにひと工夫されている。



見どころ

昭和8年（1933年）に建てられた米問屋の店舗兼住宅を、大津市で初の空き町家を活用した外国人観光客向け宿泊施設として再生したのが、大津町家の宿　粋世である。伝統木造構法を活かした構造設計、米問屋ならではの重厚で風格ある大津町家のディテールを継承しつつコンバージョンされた室礼は、外国人に限らず、日本人にとっても懐かしくて心地よい。オーナーが建築士であり、自らが設計・監理された点においても興味深い建物である。まずは宿泊して、この土地の歴史文化に触れながら、和の趣と昭和レトロが融合した魅力的な和の空間を堪能することをお奨めしたい。

奥へと続く通り土間とその上部に広がる火袋、健全な状態の木組みは当時のままでありながら、宿泊施設として改修するにあたり直面した建築的問題、法令的課題に対する解決策は大いに参考になる。

16畳のコミュニティスペース

蘇った庭

通り土間と火袋

建具、照明器具、金物等の殆どを再利用している。新調するにあたっては、既存デザインを踏襲することで調和に配慮し、落ち着いた居心地の良い空間演出に繋がっている。客室は全室５部屋。往時の面影を至るところで感じられる町家の宿である。１６畳のコミュニティースペースでは、地域文化に触れるイベントや集まりが賑やかに催されている。

客室 秋月

客室 夕照

建物名称	大津町家の宿　粋世
建築年	昭和8年（1933年）
構造・様式	木造2階建て
所在地	大津市長等3丁目3-33
電　話	077-510-0005
Ｈ　Ｐ	www.inaseotsu.com
開館時間	9：00～21：00　（電話対応時間）
アクセス	JR琵琶湖線大津駅徒歩20分　タクシー５分
備　考	国登録有形文化財（粋世主屋）

豪商　稲葉本家

ごうしょう　いなばほんけ

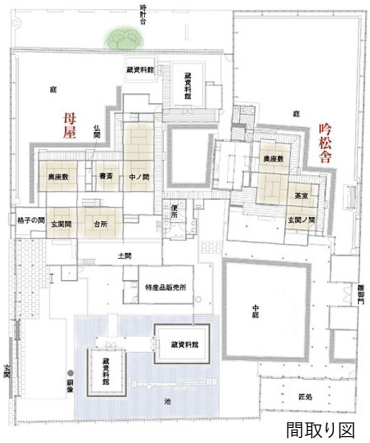
京都府京丹後市久美浜町

外観

当家は平成13年9月、十四代当主にあたる稲葉昭次氏から土地を買収、家財、文書を含む建物を提供いただき、歴史的建造物の保存修理を基本に、町内外の人々が交流できる場として建物を一部改造し「豪商稲葉本家」として開館したものである。

稲葉家初代は「美濃国の武将として生まれたが、武田信玄に抗して敗れこの地に移り住んだ」と言われているが正確にはわからない。推測では約450年美濃国（岐阜県）又は信濃国（長野県）からこの地に住んだものと思われる。

初代喜兵衛代から家業は糀屋で、七代目から藩の用達とともに沿岸交易により財を成した。七代・八代から付近諸藩の金融を一手に引き受ける豪商となり、代々付近を買い取り現在の屋敷となった。



間取り図

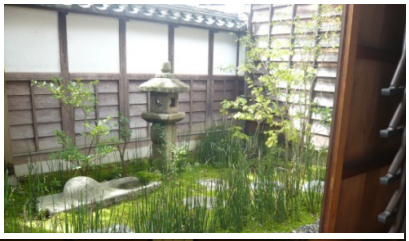
約709坪（2,345㎡）の広大な敷地に母屋・奥座敷・蔵・匠処・雛御門・通路（土間）からなり延べ面積は1,101.45㎡となる。

1階母家奥の和室

見どころ

【母家】

この住宅は長年火災などにあわなかったため不便となり、明治18年から5か年をかけ新築されたものである。玄関から土間に入り目に入るのが、この圧倒するような吹抜けの大空間である。部材は欅の柱を多用し、松材の太い柱を井桁状に組み上げて豪壮な木組を示すなど、上質かつ堅牢な構造形式となっている。しかも土間と居間を一体としてその四周には化粧貫を回らせ、空間の壮観さをよりいっそう演出している。この土間と居間を一体に吹き抜ける空間構造は、貫を多用する意匠とともに但馬地方の伝統的な町家建築にも共通に認められ、地理的に近接する但馬地方をも含めた地方形式をよく示す典型事例である。また、通り土間から独立して設けられた厨房空間はほとんど改造されず今日まで残されたことで、この地方の生活史を考える上での希少な資料として貴重である。



【吟松舎（ぎんしょうしゃ）】

奥座敷は「吟松舎」と呼ばれ文政年間（1818～1829）に浜別荘として当家北側に建築、その後移築された。派手さはないものの適度に数寄屋的な要素を散りばめられて書院座敷としてのまとまりもよく、広縁を介して庭との一体的な空間が形成されている。

【雛御門（ひなごもん）】

「雛御門」と呼ばれる長屋門は平入桟瓦葺き切妻造りの2階建てである。桁行9.4m梁行3.9m。屋根の両妻側に卯建（うだつ）を上げている。但馬地方の町々に見られるが、稲葉家もこの伝統に沿って上げたものと言える

建物名称	豪商 稲葉本家
建築年	明治18年（他文政年間建物移築）
構造・様式	木造2階建て、平屋建て
所在地	京丹後市久美浜町3102
電話	0772-82-2356
HP	http://www.inabahonke.com/
開館時間	9:00～16:00（水曜休館）
アクセス	舞鶴若狭自動車道「春日IC」→北近畿豊岡自動車道「神鍋高原IC」から豊岡経由久美浜（25km）
備考	国指定 登録有形文化財（2003年1月31日指定）

聴竹居

ちょうちくきょ

京都府乙訓郡大山崎町

聴竹居

昭和3(1928)年の創建時より変わらぬ姿で京都府乙訓郡大山崎町の天王山の麓に建つ聴竹居は、建築家・藤井厚二の第5弾の自邸として建設された名作住宅である。和洋の生活様式の統合とともに、日本の気候風土との調和を目指した昭和初期の日本の住宅として、先駆性、歴史的・文化的価値が高く評価され、藤井厚二の数ある建築物の中でも現存している貴重な物件である。それまでに建てた4軒の実験住宅の経験を活かし、真に理想的な住宅を建てるにあたって次の5つの条件をもとに聴竹居は作られた。

■8人の人間が快適に住むのに充分な大きさとする。

■来客の応接用に当てる空間は可能な限り減らし、家族の居住空間の快適さを第一とすること。

■腰掛式(椅子式)生活を主とし、畳生活も混用する。

■木造平屋の建物とし、建物のサイズを可能な限り小さくするため、調理と暖房のための電気器具を取り付けること。

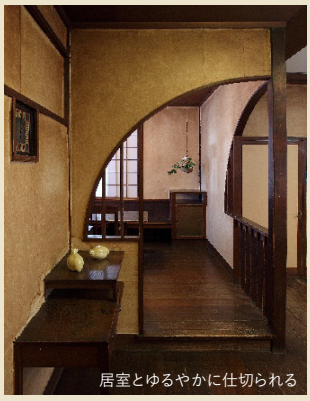
■夏季の生活の快適性を第一に考慮すること。

これらの条件は日本の住宅のテーマというべきものである。

「真に日本の気候風土にあった、日本人の身体に適した住宅」を生涯追い求めた藤井厚二の研究と実験の集大成を是非ご覧になり、体感していただきたい。

見どころ

食事室



居室とゆるやかに仕切られる

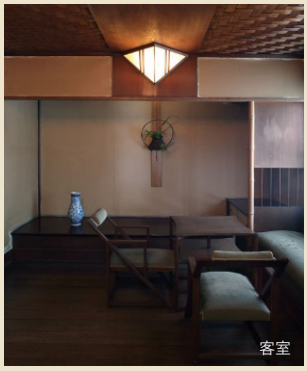
【食事室】居室の床より15cm上げて設けられた食事室は完全に仕切らず、居室の一部となっている。ベンチシート横の台の上部には花籠が吊られ、日々季節の花が盛られていた。

読書室

【読書室】居室に連続する位置に読書室と名付けられたコンパクトで機能的な設えの勉強部屋がある。わずか4畳あまりの空間に、藤井と姉妹の机と本棚が造り付けられている。子供たちの机は縁側に面して障子で仕切られ、障子を開ければ縁側越しに季節を感じる庭が望める。

【調理室】キッチンも食器棚もすべて造り付けで、作業台の引戸を開けると食事室と繋がっている。今でいう対面式キッチン。当時ではめずらしいオール電化住宅である。

調理室



客室

【客室と床の間】聴竹居の中でも特にデザイン性の高い空間。板間に椅子とテーブル、造り付けベンチが置かれ、窓には紙障子。椅子式の洋風を取り入れながら、細部を和の自然素材で構成している。

床の間は椅子に座った人に対応した目線の高さとしている。床の間と部屋を同時に照らす和紙の照明も藤井のデザインである。

縁側

【縁側】

南に面する細長い縁側。長手は約5,753㎜。三面をガラス戸(ガラスは建設当時のもの)で囲まれ、深い軒裏が視線に入らないように床から1,700㎜上部はすりガラスとし、下部も同様にすることで、四季折々の景色が額縁に切り取られたパノラマで楽しめる。

冬の晴れた日は特に暖をとる必要もなく、効率の良いサンルームとして家事や家族の団らんの場となっていた。

角に柱を設けない手法のコーナー部分を利用した花台

涼しく暮らすための工夫も見どころのひとつである。庭の木々や深い庇が夏の直射日光を遮る。また、気流・通風を考慮した通風口、床下の冷たい空気を内部を通し屋根裏へ排出させる天井排気口や、西側に設置された通気口から地中に埋め込んだ土管を通して外気を室内に送るクールチューブは天然のクーラーである。襖や障子、欄間を開けることで風が通り抜け、家は大きな一室となる(一屋一室)。

断熱は様々な研究検討の上、土塗壁を採用している。仕上げは和紙を貼るなど、天然の調湿を考えた、まさに現在の無添加・パッシブ住宅である。

建物名称	聴竹居
建築年	昭和3(1928)年
構造・様式	木造平屋建て
所在地	京都府乙訓郡大山崎町谷田31
電話	(問い合わせ、見学申込はHPから)
HP	http://www.chochikukyo.com/
開館時間	水・金・日曜日　9:00～16:00【事前申込要】
アクセス	JR山崎駅より徒歩5分　駐車場なし(近隣パーキング有)
備考	国指定 重要文化財 (2017年7月31日指定)

頼山陽書斎（山紫水明処）

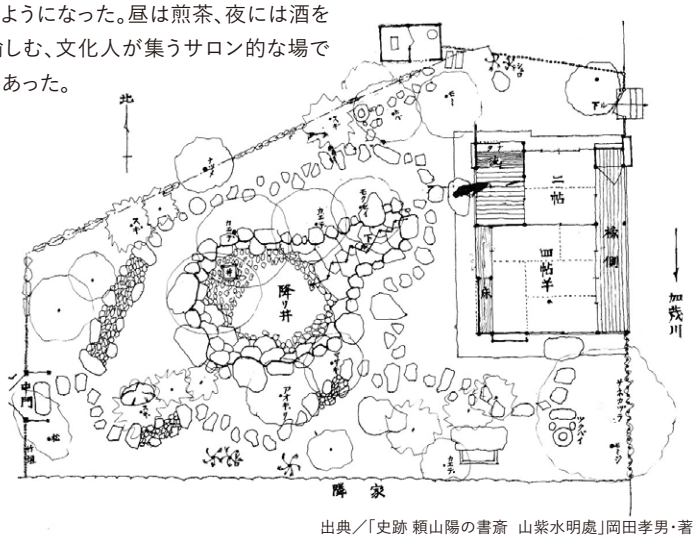
らいさんようしょさい（さんしすいめいしょ）

京都府京都市上京区

山紫水明処

山紫水明処は『日本政記』、『日本外史』の著者であり、江戸時代後期の歴史家、思想家、漢詩人、文人で、明治維新の原動力となった頼山陽が晩年を過ごした建物である。自宅である水西荘の庭内に増築した建物は草堂風の書斎と茶室をかねた離れであり、『日本外史』全22巻はここで完成した。

当時、川幅は広かったため現在のような垣根はなく、鴨川に面した縁側の下には清流が流れていた。東に見える鴨川の対岸の柳と遠くに見える東山三十六峰を一望する眺めを山陽は大変愛したと伝えられている。この書斎に山紫水明処という名をつけてから、一般に「山紫水明」とは風向明媚の代名詞として使われるようになった。昼は煎茶、夜には酒を愉しむ、文化人が集うサロン的な場でもあった。



出典／「史跡 頼山陽の書斎　山紫水明處」岡田孝男・著

見どころ

四帖半

【四帖半】

四帖半の天井は琵琶湖の葭（よし）の穂先を並べて漆で仕上げたものに、北山小丸太の隅木で寄棟の化粧屋根裏(四注天井)。

壁の腰板と建具の腰は網代で仕上げた風流なものである。

【外格子】

内障子の桟に合わせた西側地窓上部の外格子。直線は竹で曲線は南天の枝を使った趣のある華奢な作り。

【西側地窓】

西側の地窓の室内側には網代戸、外部は雨戸。ここから茶や酒を運んだという。

西側地窓と外格子

降り井

【降り井】

かつて鴨川の伏流水が湧き出していた「降り井」。地面から2mほど下に設けられている非常に珍しい意匠である。山陽が造ったかどうかは不明。

鴨川の工事により現在は枯れている。

【建物】

葛屋葺（くずやぶき）入母屋造りの建物は、鴨川べりの湿気に耐えるように堅い栗材を用い、四帖半の主室と二帖の次の間、約一帖分の板の間から構成されている。

素朴な外観ながら高度な手法と贅沢な材料を惜しみもなく使用しており、遊び心が随所にみられる。京都の蒸し暑い夏と厳しい冬の寒さ、鴨川縁の湿気対策や換気に気を配った工夫も見どころ。

●柱は皮付き赤松を由緒ある建物より譲り受け再利用したものである。

●建具にガラスが使用されている。当時、輸入の吹きガラスは非常に珍しく、1枚のガラスで小さな家が一軒建つと言われるほど高価なものであった。

●支那風の手摺の意匠は、儒学・漢詩・煎茶など中国への憧れか。手摺の外には鴨川が流れ、遥か向こうに比叡山、東山、吉田山を望む。

●京都市眺望景観創生条例に基づき特に重要な眺望景観や借景として選定された「眺望景観保全地域」に指定されており、大文字を望む景観の視点場となっている。

路地に続く入り口

●見落としそうな敷地への入り口。当時の敷地は267坪あったが山陽が亡くなったあと人手に渡った。明治の孫の代で買い戻され、母屋を解体して借家を6件建てたため、路地を共用している。

建物名称	頼山陽書斎、山紫水明処
建築年	1828（文政11）年
構造・様式	木造平屋建て・葛屋葺入母屋造り
所在地	京都府京都市上京区東三本木通丸太町上ル南町
電話	一般財団法人 頼山陽旧跡保存会　075-561-0764
HP	なし　（詳細はお問い合わせを）
申込方法	見学は希望日の2週間前までに往復はがきにて【事前申込要】
アクセス	京阪電車　神宮丸太町駅より徒歩6分
備考	国指定 史跡（1922年3月8日指定）

がんこ「平野郷屋敷」（旧辻元家住宅）

大阪府大阪市

がんこ「ひらのごうやしき」（きゅうつじもとけじゅうたく）

外観

旧辻元家住宅は平野郷鞍作（現・大阪市平野区加美鞍作）の豪農辻元家の本宅として江戸時代初期に建設された近世和風建築である。通称は平野郷屋敷。約1100坪の敷地に、主屋をはじめ長屋門、蔵5棟、茶室が建っており、床面積合計は約804坪。
1990年からレストラン「がんこ平野郷屋敷」の施設となりまた1993年からは「平野町ぐるみ博物館」を構成する施設となって、屋敷内に「くらしの博物館」が設けられた。
（ウィキペディアより）

くらしの博物館

見どころ

約1100坪の敷地に、主屋をはじめ長屋門、蔵5棟、茶室が建っており、敷地の多くを占める日本庭園は、大阪万博の日本庭園を手がけた木戸雅光による作庭である。
大阪市南部の平野区は、堺などと同じく自治都市であり、豊臣氏の正妻おねの領地であったため、大阪の陣の後も自治権を維持することができた。大阪が東洋のマンチェスターと呼ばれる所以の綿産業の中心地であり、豪農豪商の家が多く、戦禍にあっていないため、古い寺社、民家が今も残っている。辻元家はその一画にあり、江戸時代より庄屋・村長などの要職に就き、苗字·帯刀をを許された豪農である。
平野郷屋敷は、４００年前の江戸時代初期に建てられ、現在は寿司、和食のチェイン店が購入し「がんこ平野郷屋敷」店として営業している。過去に重要文化財の指定の話があったらしいが、古い母屋に接続の増築が多く、復元が難しいので断ったとのこと。
辻元家が所有していた絵画、茶器など文化財が店内と衣装蔵だった「くらしの博物館」に展示されている。
大阪府建築士会が毎年実施しているヘリテージマネージャー養成講座の見学先としても採用されている。
大阪市立工芸高校が広報動画を製作している。
https://www.youtube.com/watch?v=V0olJNVI3Ul

長屋門
奥に母屋玄関が見える。玄関は明治に入って増築されたと

庭には７０種類の植物が植えられている。雑木林をイメージして造られたそうだ。

くらしの博物館内部
「伊万里赤絵」や「楽焼」の茶碗の他、室町時代の画僧、吉山明兆の作とされる「飛鯉之図」や、江戸時代中期の絵師である伊藤若冲による「水鳥」の掛け軸など、非常に文化的価値のある作品を観ることができる。

母屋全景。

玄関ホール

庭を見渡せる客室

建物名称	がんこ・平野郷屋敷（旧辻元家住宅）
建築年	江戸時代初期
構造・様式	木造・近世和風建築
所在地	大阪府大阪市平野区加美鞍作1-3-19
電　話	06-6796-0728
Ｈ　Ｐ	https://www.gankofood.co.jp/shop/detail/ya-hiranogou
開館時間	平日11：00～15：00　17：00～22：00 土、日、祝　11：00～22：00
アクセス	ＪＲ関西本線 加美駅 徒歩3分
備　考	

旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）

大阪府吹田市

きゅうにしおけじゅうたく（すいたぶんかそうぞうこうりゅうかん）

主屋全景

旧西尾家住宅は、平成21年（2009年）12月8日、重要文化財に指定された仙洞御料庄屋屋敷である。数寄屋風を意識した主屋、茶道藪内家の指導になる茶室、牧野富太郎の関与が伝えられる温室、建築家武田五一が和洋折衷の意匠を試みた離れなどで、文化性に富む優れた建築である。日本を代表する音楽家、貴志康一の生家でもある。近代の生活や文化が見事に体現された和風住宅建築として極めて優れている。

積翠庵

見どころ

仙洞御料庄屋の伝統を感じさせる表門、主屋の式台玄関、大座敷と次の間との境の置上げ技法による菊華をあしらった欄間や水仙の釘隠し、大正頃のガラス戸のある広縁、箱階段や電話室、台所南壁面の刃形開閉器を備えた古風な配電盤。また、台所には武田五一デザインといわれる家具等がある。離れでは和風棟土縁の丸窓や皮付き丸太の垂木を並べた化粧屋根裏の渡り廊下や洋風棟応接室のステンドグラスやサンルームの菱形ガラスの嵌め殺し腰板等がある。又、離れの屋根瓦はアール・ヌーヴォー風とも言われている。

【主屋】

桟瓦葺入母屋造り、本二階建の豪農の建物である。居住棟、玄関棟、計量部屋棟の３棟で構成され、南側には式台付の玄関があり、接客用の六畳の茶室（味々庵）がある。西側奥に十二畳半に床、床脇、付書院を設けた大座敷、その手前に十畳の間があり、南側には幅一間の広々とした縁側が廻っており、全面カットガラスのはまった引違戸が建て込まれ、極めて華やかな雰囲気を醸し出している。

【積翠庵（せきすいあん）】

第十一代当主與右衛門義成は藪内流十代休々斎に師事し、藪内家の茶室「燕庵」と「雲脚席」の写しといわれる積翠庵を建てた。母屋西側の庭には桂離宮の卍亭とも箱根三井別邸の四腰掛の写しともいわれる四阿がある。

【離れ】

武田五一の簡素で洗練された和風意匠の和風棟とビリヤード室、応接室、それに付属するサンルームの洋風棟が渡り廊下で繋がれている。全体としてゆったりしているのは当時には珍しいメートル・モジュールで作られているからである。応接室には武田五一デザインによる花と鳥をあしらたアール・ヌーヴォー風の質の高い意匠のステンドグラスや、セセッション風のオリジナルの照明器具が残っている。また、五一の住宅改善の提案を具体化した水廻りの工夫がみられる。流しと一体となった開放的な出窓や通風への配慮がなされている。水洗便所のための浄化槽なども設けられていた。

建物名称	旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）
建築年	（主屋）1895年（明治28年）
構造・様式	木造一部2階建て・数寄屋
所在地	大阪府吹田市内本町2丁目15番11号
電　話	06-6381-0001
Ｈ　Ｐ	http://www.suita.ed.jp/hak/Kyunishioke/kyunishioke.html
開館時間	9:30～16:30（月曜休館）
アクセス	JR吹田駅又は、阪急吹田駅下車徒歩10分。
備　考	平成21年（2009年）2月8日　重要文化財に指定 （主屋以外の見学は要予約）

堺市茶室　伸庵・黄梅庵

大阪府堺市

さかいしちゃしつ しんあん･おうばいあん

千利休をはじめ多くの茶人を輩出した堺の茶室と千利休の茶の世界に触れる。

世界最大級の墳墓・仁徳天皇陵古墳前の大仙公園内には国登録有形文化財である堺市茶室「伸庵」「黄梅庵」がある

〈写真：堺観光ｶﾞｲﾄﾞHP〉

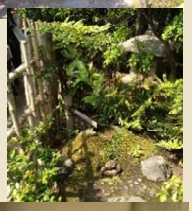
見どころ

2つの移築された建物をつなぐように露地が整備され、元々この場所に建てられていたかのように馴染んでおり、季節の風景とともに和の意匠を体感することができる。

黄梅庵　躙口

貴人口

待合



蹲

伸庵

（写真：個人撮影）

伸庵 立礼席

伸庵〈写真：堺観光ｶﾞｲﾄﾞHP〉

【伸庵(しんあん)】

昭和4年に数奇屋普請の名匠といわれた仰木魯堂が粋をこらして建てた茶室で元東京芝公園にあったものを昭和55年に福助株式会社から寄贈され移築。一部2階建の桟瓦葺の建物で、中庭を囲み玄関・広間・茶室・座敷等が配置されている。各室の柱間寸法の決め方や畳の寸法は江戸間や京間、中京間を組み合わせた特色ある間取りで、面皮材や丸太材、角材の柱材も適所に用いる工夫が見られる。茶室は伝統的な平三畳台目の形式を踏襲しながらも、貴人口を併用することで客座の開放感など近代らしい空間が作られている。茶室を含めて10室の和室がある。

黄梅庵〈写真：堺観光ｶﾞｲﾄﾞHP〉

【黄梅庵(おうばいあん)】

奈良県橿原市今井の豊田家住宅（国指定重要文化財）にあった江戸時代からの茶室を、日本の電力開発に尽力し茶道の四天王の一人とされた故松永安左エ門翁（耳庵）が譲り受けて改装し小田原で愛用されていたもので、昭和55年に遺族より寄贈され移築したものである。庵名は梅の実が黄熟する頃に完成したことから、耳庵によって命名。外観は銅板葺きの屋根を重ね合わせた変化に富んだ構成で、内部は八畳敷の広間と小間と勝手水屋等からなり、広間の正面には床を構え、天井は化粧屋根裏とした軽快な数寄屋造である。また、小間は平三畳で下座床を設け炉は向切としている。豊田家の頃には今井宗久の茶室であったと伝えられていたが、建築様式的にはその頃まで遡ることが難しく、建築された年代等は不明である。しかし堺の茶人今井宗久・宗薫親子ゆかりと伝えられる茶室を耳庵が移築し愛用したことも、歴史的価値を高めている。

建物名称	堺市茶室「伸庵」「黄梅庵」
建築年	「伸庵」昭和4年　　「黄梅庵」江戸時代
構造・様式	「伸庵」木造2階建　　「黄梅庵」木造平屋建
所在地	堺市堺区百舌鳥夕雲町2丁（大仙公園内）
電　話	072-247-1447
Ｈ　Ｐ	https://www.sakai-tcb.or.jp
開館時間	9:30～16：30（月曜休館）
アクセス	JR阪和線百舌鳥駅徒歩6分　駐車場有
備　考	堺市登録有形文化財

さかい待庵・無一庵（さかい利晶の杜）

大阪府堺市

さかいしちゃしつ　さかいたいあん･むいちあん

堺出身の偉人千利休と与謝野晶子をクローズアップしたミュージアム「さかい利晶の杜」が千利休屋敷跡の前に2015年に開館した。そこには千利休作とされる茶室が復元されている。

さかい待庵〈写真：さかい利晶の杜HP〉

見どころ

建造当時の利休の構想を文献等から読み取り復元されている。利休の茶の世界・茶室に対座した時の距離感や空間を体感して頂きたい。

1尺3寸4分角の隅炉と5尺の床

天井

躙口

さかい待庵（写真：個人撮影）

無一庵〈写真：個人撮影〉

さかい待庵〈写真：さかい利晶の杜HP〉

【さかい待庵（たいあん）】

京都府大山崎町の妙喜庵にある「国宝待庵」は千利休作で唯一現存する茶室であり、利休が豊臣秀吉の山崎城内に営んだ簡素な素材で造られた、二畳隅炉の極侘びの茶室を移築したものである。「さかい待案」は「国宝待庵」の造形性で床の間口幅や炉の大きさなどの不可解な問題点を洗い直し、その祖形を復元している。

無一庵〈写真：堺市より提供〉

【無一庵（むいちあん）】

天正15年10月1日に催された北野大茶の湯において、豊臣秀吉・今井宗久・津田宗及の四畳半と共に構えられた利休の四畳半の復元である。

千利休屋敷跡〈写真：さかい利晶の杜HP〉

建物名称	さかい利晶の杜　「さかい待庵」「無一庵」
建築年	2015年
構造・様式	木造平屋建
所在地	堺市堺区宿院町西２丁１番１号
電　話	072-260-4386
Ｈ　Ｐ	https://www.sakai-tcb.or.jp
開館時間	9:00～18:00（月曜休館）
アクセス	阪堺線 宿院駅徒歩1分
	南海高野線 堺東駅よりバスで約6分
	南海本線 堺駅より徒歩で約10分／バスで3～5分

太閤園「淀川邸」（旧藤田男爵家 東御殿）

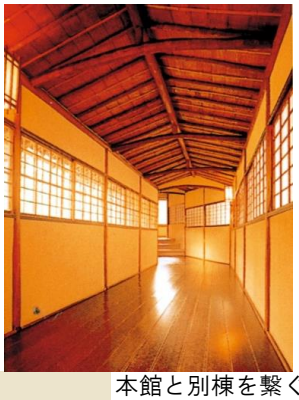
大阪府大阪市

たいこうえん「よどがわてい」（きゅうふじただんしゃくけ　ひがしごてん）

旧藤田男爵家の「網島御殿」としての約8000坪の庭園と重厚な和風建築群の内、戦災を免れた東御殿がこの「淀川邸」である。複数の料亭・レストランからなる「太閤園」の和館料亭部分を占めている。奈良や京都とは異なり、自分達のハレの和の空間、ハレの室礼･調度品を大空襲で失ってしまった大阪市民にとって、戦後公開されたこの淀川邸は、近世から育み円熟させた住文化のハレの部分を担ってくれる場所でもあり、四季の美しさを愛でる心と、品格ある和の空間の魅力をつなぐ、大切な場所となった。お見合い･両家引合せの思い出や、婚礼はもちろん、長寿・結婚記念日など家族の幸せな日は、数多くある大小の和室が場となり、受賞祝賀会・謝恩会・同窓会など社交の場としても、今も「きものを着て行きたい」憧れの場所である。寺社でなくホテル・旅館でもないその数々の和室は「太閤園の〇〇の間の感じ」という施主の声に繋がることもある。

太閤園の門
車もこの門を潜る。入って正面が淀川邸、右に進むとＲＣの新館「迎賓館」に横付けとなる。

淀川邸の玄関



本館と別棟を繋ぐ廊下

離れ茶室「大炉の間」

見どころ

最大の大広間には尺角とも思われる台湾からの桧の柱や美しい柾目の長い長押、一枚板の精巧な欄間など、素晴らしい材による構成と細部の意匠が見られる。また能舞台に転じる仕掛け、置かれた調度品、生け花と器、季節による建具の開け具合など、おもてなしの心が散りばめられている。明治期からいわゆる邸宅が西洋式に動く中、関西財界では欧米に流出する貴重な品の蒐集に力を入れると共に、豊かな和の衣食住の文化を守ろうとする向きがあった。五代友厚氏に次いで第２代大阪商工会議所会頭を務めた藤田傳三郎氏もその一人であり、道を挟んで広大な敷地に茶室などと共に存在する藤田美術館は、有名な国宝曜変天目茶碗をはじめ数々の国宝・文化財が春・秋の季節限定で蔵の中で展示されてきた。
（藤田美術館は2020年に向けて建替、閉館中）

庭を散策すると、四季折々の風景の中に数棟が見え隠れし、複数の料亭・レストランとなっている。何度訪れても飽きることはなく、しかし変わらぬ空気が漂う。

邸内の十数室の大小の和室
それぞれ趣が異なる。畳に懐石膳または座卓であったが、今は椅子が中心である。

本館１階「桜の間」

本館１階「羽衣の間」とその欄間

建物名称	太閤園　料亭 淀川邸
建築年	明治43(1910)年頃
構造・様式	木造2階建
所在地	大阪市都島区網島町9-10
電　話	06-6356-1110(太閤園代表)
Ｈ　Ｐ	https://www.taiko-en.com/restaurant/yodogawatei/
開館時間	12:00～22:30（営業時間）
アクセス	JR東西線大阪城北詰駅(3 号出入口)徒歩 1 分 京阪京橋駅(片町口)徒歩 7 分 地下鉄長堀鶴見緑地線京橋駅(2 番出口) 徒歩 5 分
備　考	写真提供:太閤園

倚松庵

いしょうあん

兵庫県神戸市

外観

「椅松庵」は、文豪・谷崎潤一郎が1936年から1943年まで居住し、松子夫人やその妹たちをモデルとした小説「細雪」の舞台となりました。庵内には著書や参考文献等を集めた「谷崎文庫」を併設しており、「文学の庵（いおり）」として、多くの市民や観光客に谷崎文学の世を親しんでいただくことを目的として開館されています。

2階8畳

見どころ

小説「細雪」の舞台というだけあって、小説の情景を思い起こすことも楽しみの一つです。2階8畳は（右上写真）、演奏会に出かけるために3姉妹が装いをこらすという優雅な「細雪」の冒頭のシーン。また、この部屋は、幸子・貞之助夫婦の寝室で、東に1間、南に1間半の窓があり、欄干があります。さんさんと陽光が差し込み、家中で一番明るく広い空間となっています。

右の写真は2階西の部屋。六甲山脈を望めるのはこの部屋のみで、山の見える風景の「外へ向かって開かれた」雰囲気が作家に「旅立ち」場面を書かせる衝動を駆り立てたと言われています。

右の写真は1階洋間に面しているテラス。庭の土の面から30センチほど高くなっており、当時をそのまま復元されました。このテラスでの谷崎潤一郎と松子夫人とのツーショット写真は有名。

「大」大阪（1920年代に流行した呼称）のベッドタウンとして急速に進歩し始めた阪神間の中流階級の、和洋折衷の新建築の典型的な建物。付近の一般的な当時の農家の建築様式とも異なり、「昭和初期の典型的な」住宅様式となっています。

1階は、外観の和風建築の様相とは違い、洋間、食堂、廊下、テラス等が洋風になっています。「特にまっすぐな廊下はその象徴。各部屋に行くのに別の部屋を通らなくてもいいように、しかも、和風建築のよさも取り入れて隣室との通路も設けてある。（中略）洋的合理精神と和的協調精神の見事な調和である。」（参考資料引用）

対して2階は「細雪」の登場人物の部屋となる3つの和室からなり、庭の景色と相まつて、当時をしのばせる和風空間になっています。

※神戸市ホームページより一部引用

1階食堂

1階応接間

建物名称	倚松庵（谷崎潤一郎旧邸）
建築年	1929年（昭和4年）／移築復元1990年（平成2年）
構造・様式	木造２階建て
所在地	兵庫県東灘区住吉東町1-6-50
電　話	078-842-0730
Ｈ　Ｐ	http://www. city. kobe. lg. jp/information/project/urban/tender/isyoan. html
開館時間	土日のみ10:00~16:00(年末年始は休館)
アクセス	JR住吉駅から南東へ900m徒歩約12分/六甲ライナー魚崎駅から北へ150m徒歩約2分/阪神魚崎駅から北へ450m徒歩約6分/市バス東灘区役所前停留所から南へ500m徒歩6分
備　考	入館料無料

篠山市立　青山歴史村

兵庫県篠山市

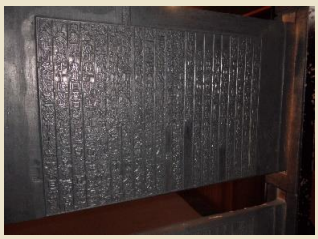
ささやましりつ　あおやまれきしむら

長屋門

篠山市立青山歴史村は、篠山藩主青山家の明治時代の別邸（桂園舎）を中心として３棟の土蔵と長屋門から成り立っている。長屋門は篠山藩旧藩士澤井家にあった木造入母屋造、茅葺きのもので、昭和３２年（１９５７）にこの地に移築された。文化年間（１８０４～１８０８）頃の建築と考えられている。
これらの建物は、昭和６２年（１９８７）から青山歴史村として一般公開されていたが、平成１０年（１９９８）に歴史村を管理していた財団法人青山会から旧篠山町に全資産をご寄付いただいたのを機会に、町立（平成１１年より市立）の史料館として蔵書の保管をはかるとともに大学などの調査研究にも活用されている。
また、藩政文書とともに、青山家ゆかりの品々や篠山藩校「振徳堂」の蔵書などを所蔵している。その中から、全国的にも珍しい漢学書関係の版木（篠山藩では藩士の教育のために、版木で数多くの漢学書を印刷し刊行しており、当館には版木を１２００枚余り所蔵。材質は、桜の木を使用）、篠山城石垣修理伺の図面、藩政始末略、印判、鼠草紙絵巻（作者不詳。鼠を擬人化した室町時代の怪婚譚が主題で民衆の風俗等を描いている）、江戸時代の歴史文化を物語る史料の数々を展示している。

見どころ

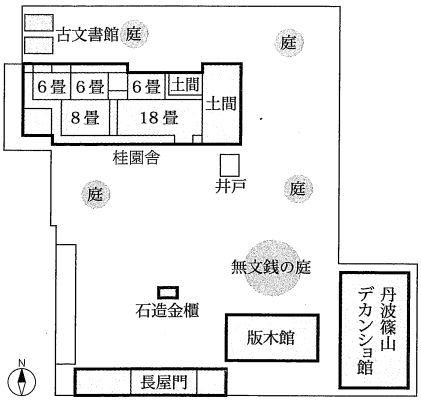
青山歴史村は、篠山藩主青山家の別邸「桂園舎」(旧庄屋住宅を移築)を中心にして、３棟の土蔵と長屋門(移築)から成る。全国的にも珍しい漢学書関係の版木１２００余枚、篠山城石垣修理伺い図面、藩政始末略、印判、ねずみ草子等、江戸時代の歴史文化を物語る史料の数々を展示している。また、市民向け伝統文化関連ワークショップなども企画されている。伝統的建造物としては、主屋「桂園舎」は平入、土間＋変形六間取り＋縁側＋庭の構成で建設当初の姿がよく残されている。また、長屋門は市内では珍しい入母屋造、茅葺の建物で、武家屋敷の多くが消滅している今日、当時の形態をうかがい知る貴重な建物となっている。



桂園舎

金櫃

篠山市指定文化財。
花崗岩の板石で組み合わせた金櫃（金庫）で、江戸時代「貨幣司」が大手馬出付近にあり、土中に埋め地下金庫として使用していたもの。
縦216ｃｍ・横120ｃｍ
深さ70ｃｍ
石厚12ｃｍ



敷地面積　3,230.74㎡

建物名称	篠山市立青山歴史村
建築年	1804～1818年頃（1957年に移築）
構造・様式	木造平屋建・木造二階建
所在地	兵庫県篠山市北新町48
電　話	079-552-0056
Ｈ　Ｐ	http://www.withsasayama.jp/REKIBUN/aoyama_top.htm
開館時間	9：00～17：00（受付終了16：30）
アクセス	JR福知山線「篠山口駅」→バス「二階町」徒歩5分
備　考	景観重要建造物。長屋門は篠山市指定文化財。

兵庫県立舞子公園 旧木下家住宅

兵庫県神戸市

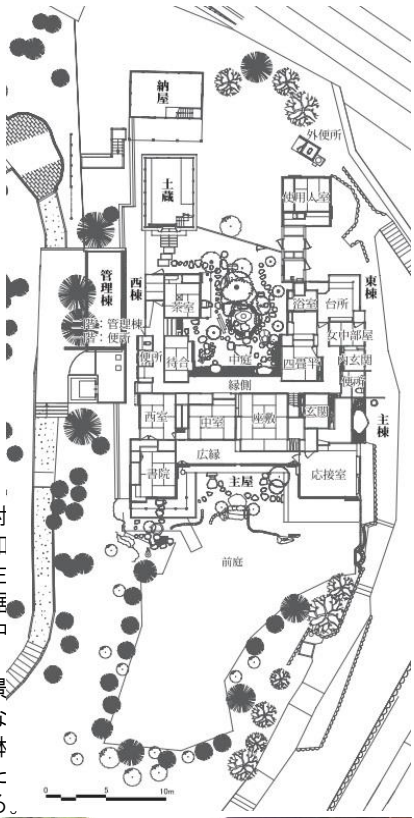
ひょうごけんりつまいここうえん　きゅうきのしたけじゅうたく

全景

旧木下家住宅は、神戸で海運業を営んでいた又野良助氏が、私邸として昭和16年に建てられた数寄屋造近代和風住宅である。昭和27年に明石で鉄鋼業を営んでいた木下吉左衛門氏の所有となり、平成12年に木下家より、兵庫県に寄贈された。民家風の虫籠窓を付けた主屋を中心に、東面に玄関、北東に台所、北西に茶室、南東に応接室、南西に書院を配し、北側に中庭を取り込んだH字型平面となっている。
木下家の所有となったのち、昭和28年頃に土蔵を移築、昭和30年代に納屋の増築などを経て、今日の姿となる。
主屋（主棟）はツシ二階建てで、南面は応接室と書院が張り出し、座敷、中室の縁側からテラス状の靴脱ぎ、芝生の前庭との連続性は、和風住宅ながら洋風を想起させる構えとなっている。応接室は大壁の漆喰塗仕上げで、大理石貼りのマントルピース、アールデコ調の照明器具など、昭和初期の洋風住宅の意匠の特徴が良く現れている。
茶室は、掛け込み天井や下地窓、土壁、シャレ木の床柱等が使われ、草庵風である。待合、水屋などの設えとともに昭和戦前期の雰囲気を良く留めている。便所、洗面所周りは廃材の木材が使われるなど、数寄屋ならではの遊びも見られる。

見どころ

阪神・淡路大震災以後、姿を消しつつある阪神間の和風住宅のなかで、創建時の屋敷構えをほぼ完全に残す貴重な建物である。芝生敷の前庭と茶庭風の中庭には、創建時の庭造りの様子が残る。戦前期の西洋文化の生活様式（マントルピースのある応接室や大きなガラス窓）を取り入れた和風住宅であるとともに、草庵風の茶室も備える。材料には竹と桐が多く使用され、建物の細部には、数寄屋大工や職人の技による繊細なつくりが見られる。
座敷の床の間の天井は亀甲網代編で、琵琶床を備える。
夏は襖を葦戸に入れ替えたり、木下家より寄贈の雛人形や兜飾りや羽子板を飾ったり、月に一度はお茶会を催すなど、四季折々の日本文化を体験することができる。



芝生を中心とした明るい前庭に対して、中庭は露地（茶庭）風の和風庭園で、主庭といえる。この主庭は、四畳半茶室に付随する蹲踞と降り蹲踞という二つの蹲踞が中心となって構成されている。
大振りの降り蹲踞は、中庭の主景となっており、手水鉢には見事な鞍馬石の自然石が用いられ、中鉢形式（手水鉢の周囲が海になった形式）の蹲踞として見応えがある。

中庭の様子（中央は降り蹲踞）

建物名称	兵庫県立舞子公園 旧木下家住宅
建築年	1941 年（ 昭和16年 ）
構造・様式	木造ツシ二階建て・数寄屋
所在地	兵庫県神戸市垂水区東舞子町11-58
電　話	078-787-2050
Ｈ　Ｐ	http://hyogo-maikopark.jp/
開館時間	10:00～17:00（月曜休館）
アクセス	JR舞子駅・山陽電鉄舞子公園駅から徒歩5分
備　考	国登録有形文化財（主屋、土蔵、納屋）

今西家書院

いまにしけしょいん

奈良県奈良市

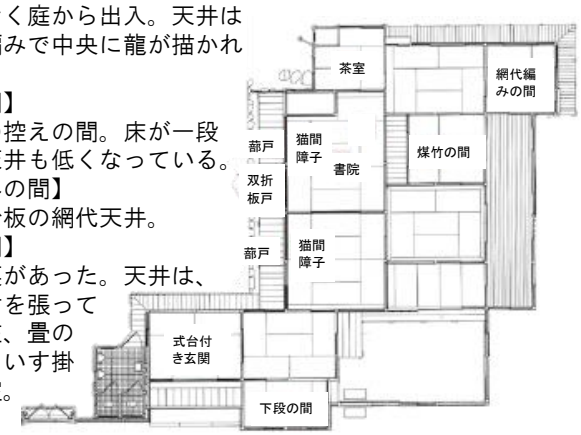
今西家書院は、永く興福寺大乗院家の坊官を努められた福智院氏の居宅を大正13(1924)年、今西家が譲り受けた。一説には大乗院の御殿を賜り移築したものとも伝えられている。昭和12(1937)年8月25日、国宝保存法により民間所有の建造物として初めて国宝の指定を受けたもののひとつである。その後文化財保護法の施行に伴い、昭和25(1950)年、重要文化財となった。江戸初期、寛永7(1854)年、元治元年（1864）年、明治中期、昭和と度重なる修理を経て大切に守られ、現在に至っている。

書院

見どころ

書院造の初期（室町時代）の遺構。角柱・畳敷・障子・襖・棹縁天井等は現代住宅の和室の基本に通じるもので、和室の原点を感じることができる。庭に面する二つの間（書院）は建築当時は板敷きだったところを、江戸時代に床の間が造られ、畳敷きの二間になった。鴨居ははめ込み式で、鴨居と敷居を外すと元の板敷きの一間に戻すことができる。また、一本の敷居溝に二枚の障子が入る猫間障子は、縦の桟が同じ幅となっており、閉めると大きな障子に見え、端正な美しさを醸し出している。双折板扉は大陸から伝わった古い形式の外開きの建具。中塗り壁に何重にも和紙を貼り重ねられた壁など、寝殿造の名残りもあるが、入母屋造軒唐破風や檜皮葺屋根などに堂々たる書院造の魅力を十分に味わうことができる。

【茶室】
躙り口はなく庭から出入。天井は杉の網代編みで中央に龍が描かれている。
【下段の間】
お供の者の控えの間。床が一段下がり、天井も低くなっている。
【網代編みの間】
太い杉の柾板の網代天井。
【煤竹の間】
昔、囲炉裏があった。天井は、幅広の煤竹を張っている。現在、畳のテーブルといす掛けの喫茶室。



平面図（出典：株式会社今西清兵衛商店 HP）

猫間(子持ち)障子

上下2枚のしとみ戸(半蔀)

双折板扉(諸折戸)
お輿に乗った身分の高い方専用の出入り口

茶室

煤竹の間

建物名称	今西家書院
建築年	室町時代中期
構造・様式	木造1階建て・書院造
所在地	奈良市福智院町24-3
電　話	0742-23-2256
Ｈ　Ｐ	http;//www.harushika.com/study/
開館時間	午前10時～午後4時（休館；月、イベント開催時）
アクセス	JR･近鉄奈良駅徒歩15分または天理行バス福智院下車
備　考	国指定重要文化財　　入館料：要

中家住宅

なかけじゅうたく

奈良県生駒郡安堵町

主屋外観

中家住宅は、大和川北岸に残る大和地方の典型的な環濠屋敷である。屋敷は外濠と内濠の二重の濠に囲まれ中世土豪の平城式居館の姿を現代に伝える。中氏の祖先は足利尊氏に従い大和に入り、この地に居館を定めた。武士として活躍した後、国替えを期に帰農し大地主となり、現在に至っている。そのため、建物は武家造りと農家造りを併せ持つ造りとなっている。主屋は万治二年(1659年)頃の創建と推定され、新座敷には安永二年(1773年)の棟札がある。
その他、表門、米蔵、新蔵、乾蔵、米蔵及び牛小屋、持仏堂、庫裏の９つの建造物と、宅地、濠、竹藪が重要文化財に指定される。現在も邸内に住んで維持管理をされている。

【表門と内濠】
表門正面の内濠に掛かるはねあげ橋は、夜間には中央の板を外し、外敵の侵入を防いだとされている。表門には、橋を監視する為の物見窓がある。

【主屋】
主屋の屋根は大和棟形式で、その姿は極めて美しい。日本郵政発行の切手「日本の民家」シリーズのモデルにもなった。
土間には、11の焚口が勾玉型に並ぶ国内最大級の竈がある。

【新座敷（勅使の間）】
新座敷は、数年に一度訪れる役人をもてなす為に建てられた、大変上質な普請である。
(天井板：春日杉、床柱：北山杉柱：栂、縁側：欅板張り)
高床になっており、主屋からは数段上がる。縁側から広がる見下ろしの眺望が絶妙である。
特別な来客時以外は使われなかったため、保存状態が良好で創建当時の姿を今に伝える。

【持仏堂本堂・庫裏】
中氏一族が祖先を弔うために、享保十九年（1734年）に菩提寺である持仏堂を建立。本堂内には多くの仏像が安置されている。
僧侶の住まいである庫裏は、茅葺屋根に本瓦葺きの下屋を持つ美しい佇まいで、板の間の台所には「座り流し」や「持ち出しくど」（移動式かまど）がある。食い違い四間取りのコンパクトな空間は現代住居として住んでみたいと思わせる魅力がある。

見どころ

＜ダイナミックな架構＞
主屋は、曲がりの強い大きな地松丸太が多用されている。その姿は圧巻で、民家の力強さを十分に堪能できる。
＜おもてなしの空間＞
新座敷をはじめ、主屋の奥にある「蒸し風呂」や、内濠で観月会（船遊び）をする為の「入り船の庭」など、大変風流なおもてなしの場がある。
新座敷には”月にむら雲、波に兎”の意匠が彫られた欄間や狩野派の絵師により描かれた襖がある。釘隠し等の金物も上質なものばかりで見どころが多い。
三畳の茶室も併設されている。空間全体から、高い品格と知性が感じられる佇まいである。

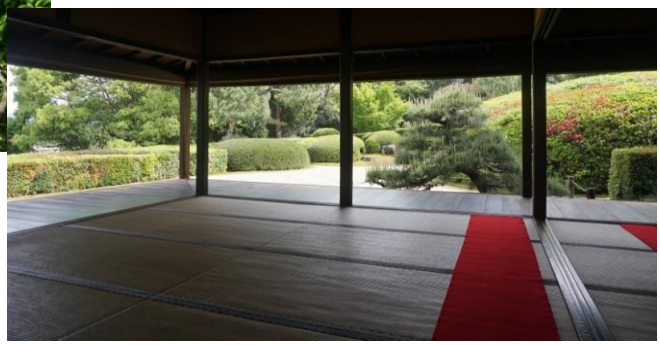
建物名称	中家住宅
建築年	江戸時代
構造・様式	木造1階建て・環濠屋敷
所在地	生駒郡安堵町窪田133番地
電　話	0743-57-2284
Ｈ　Ｐ	http://www.town.ando.nara.jp/content
開館時間	午前10時～午後5時、見学は電話で事前に予約
アクセス	近鉄平端駅またはJR大和路線法隆寺駅からタクシー または安堵町コミュニティバス奈良交通かしの木台線 （法隆寺より約5km）
備　考	重要文化財

臨済宗大徳寺派　慈光院　書院

奈良県大和郡山市

りんざいしゅうだいとくじは　じこういん　しょいん

慈光院は、片桐且元の甥で当地の大名であり茶道石州流の祖である片桐石見守貞昌(石州)が、1663年(寛文3年)に、父の菩提寺として建立。片桐石州の茶の教えは、徳川家綱、水戸光圀や大名の多くが学んだ。
一之門から鬱蒼とした霰零しの石畳を歩いて行くと茅葺きの茨木城楼門がある。片桐且元の摂津茨木城の楼門（櫓門）を移設したこの門をくぐると明るく開けた庭があり、その先の右手に、大きな茅葺きの書院がある。左手には寺務所棟、書院の北側に渡り廊下で繋がる別棟の本堂がある。書院の北東と北西に趣の異なる2つの茶室二畳台目の高林庵と三畳の閑の席（逆勝手）が配されている。



見どころ

石州流茶道の祖片桐石州が父の菩提寺として建立したが、寺としてよりも境内全体が一つの茶席として造られている。表の門から建物までの道、座敷や庭園、露地から小間の席までの全てが、石州の演出そのまま三百年を越えて眼にすることができる貴重な場所となっている。書院から東南方向に庭園（史跡及び名勝指定）と大和平野の借景を見渡すことができ、まさに庭屋一如のごとく空間は他に類を見ず圧巻である。全体的に天井や鴨居の高さが低く押さえられ、座敷に座ったときに最も安らぎや落ち着きが出るように考えられている。建築には地域の材が使われており、全体に装飾は排除され、華美を排した佇まいに高い精神性が表れており、簡素にして品格のある和の空間である。石州がこだわって造った重要文化財の手水鉢やつくばいも趣を添えている。

茨木

書院玄関の前

書院入

床の間

女の字(めのじ)

独座(どくざ)

【書院】
寺院でありながら、この書院が中心的建物。茅葺きの農家風外観である書院は、格式の高い荘厳な書院とは明らかに異なる思想が表れている。

【茶室　閑】
書院入り口の左手にある、三畳の茶室。席中は少し暗い。躙り口はなく、書院の北側廊下からの貴人口より入る。

【茶室　高林庵】
書院北東隅のある二畳台目の茶室。石州の代表的な席で、手前座の奥に床の間がある亭主床や二畳台目の隣に二畳の控えの間を設けている。

建物名称	臨済宗大徳寺派　慈光院
建築年	1663年(寛文３年)
構造・様式	木造１階建て・書院作り・
所在地	大和郡山市小泉町865番地
電　話	0743-53-3004
Ｈ　Ｐ	http;//www.1.kcn.ne.jp/~jikoin
開館時間	午前9時～午後5時　(年中無休)
アクセス	JR小泉駅または近鉄郡山駅バス片桐西小学校下車
備　考	書院・高林庵・閑茶室；国指定重要文化財 庭園；史跡及び名勝指定

奈良学園セミナ-ハウス　志賀直哉旧居

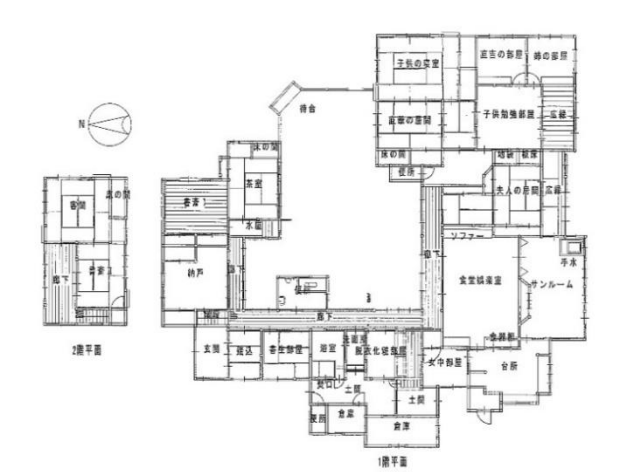
奈良県奈良市

ならがくえんせみなーはうす　しがなおやきゅうきょ

志賀直哉旧居は、直哉自ら構想し、京都の数寄屋大工の下島松之助が昭和４(1929)年に竣工させた住宅である。直哉が昭和13(1938)年に転居した後は個人に売却され、昭和22（1947)年から26（1951）年まで米軍に接収された。返還後は、厚生年金保養施設として利用されていたが、昭和50（1975）年に老朽化のため建替えが計画された。その時、近隣住民を中心として保護運動が展開され、昭和53（1978）年に奈良学園がセミナーハウスとして買収した。平成21（2009）年には、建築当時の姿に復元修理され、 平成28（2016）年、奈良県指定有形文化財となった。

見どころ

建物は、昭和初期の文人宅に相応しく、上質で落ち着きのあるものである。全体構成は、数寄屋造りを基調とし各所に近代的な洋風意匠を加えるが、各要素は破綻なく見事に調和している。志賀直哉は、日記や手紙の中で、住宅に対する考え方を明確にしており、自身を表現する方法のひとつとしてこの建物があった。北棟は、書斎、茶室といった内証的な場、「高畑サロン」と呼ばれ直哉を慕う多くの文人画人が集ったサンルーム、食堂は公の場とした。一方、子供部屋を中心に構成された南東棟は、配置、窓の取り方など随所に家族の絆を大切にした直哉の思想が伺える。



サンルームの採光窓

こぶし丸太の門屋棟木

食堂の革張りソファー

サンルームの手水

【茶室】
6畳広間の茶室。 床柱は、桧の風倒木。 床框も桧である。 床の間前は杉目透か しの平天井、点前畳 上部は蒲の落天井と し、道庫がある。 東側のくぐり戸を通り、 待合のある茶庭から 入る。貴人口のみで 躙り口はない。

【サンルーム】
食堂から1段下がった床は、 瓦製の四半敷きとし、井戸を 模した手水や躙り口に見立て た板戸を設けている。天井は 張らずに架構の丸太を見せ、 葦を煤竹と小丸太で交互に 押さえた数寄屋の意匠である。 棟際には採光窓も開けられている。

【食堂】
床は松板張り、東側にソファー を西側には台所と両面から使 えるハッチのある食器棚を造り 付け、漆喰塗り折上げ天井の 洋間であるが、建具は障子を 使い、赤松の長押を廻している。

【2階客間】
座敷飾りを備えた8畳の客間。床柱は直哉の好んだ赤松。床框は、桧の磨き丸太で、天端の太鼓落とし部分を漆塗りで仕上げている。鉤の手に繋がる窓は、腰を低く抑え、2箇所の窓を開け放つと、若草山を借景に北側の池庭を望むことができる。

建物名称	志賀直哉旧居
建築年	昭和4年（1929年）
構造・様式	木造2階建て・数寄屋和洋折衷様式
所在地	奈良市高畑町1237-2
電　話	0742-26-6490
Ｈ　Ｐ	http://www.naragakuen.jp/sgnoy/
開館時間	午前9:30～午後5:30(冬季 午後4:30)休館：年末年始
アクセス	JR･近鉄奈良駅から市内循環バス「破石町」下車徒歩5分
備　考	奈良県指定有形文化財　　入館料：要

琴ノ浦温山荘園　浜座敷

和歌山県海南市

ことのうらおんざんそうえん　はまざしき

【琴ノ浦温山荘園概要】

琴ノ浦温山荘園は、新田帯革製造所の創業者で、造園を趣味にしていた新田長次郎翁が、５５歳の頃「健康回復には己の欲すること、好む所を趣味として行うのが第一の養生法なり」と助言され、別荘の造営を始めようと決心し、大正初期から昭和にかけて造園されました。黒江湾から海水を引き、その潮の干満によって水位が変動し、池泉景観が変化する「潮入式池泉回遊庭園」の中には、浜座敷、主屋（本館）、茶室（鏡花庵）などが庭園と一体的に建てられています。

庭園は国指定の名勝に、建造物は重要文化財に指定されています。また、平成２９年には日本遺産にも認定されました。

主屋（本館）

茶室（鏡花庵）

浜座敷

見どころ

浜座敷に入ると、寄り付き６畳間の北側に、大きな花頭窓が壁一面に広がっているのが印象的です。外部から見ると、雨戸の戸袋は設けず、雨戸の巾だけ敷居と鴨居を横に伸ばし、そこに雨戸が納まるスッキリとした意匠になっています。寄り付き６畳間と１０畳間の境には、一連の金と銀の雲の文様の襖があり、竹の輪とコウモリの引手が付いています。また、縁のガラス障子は、雨戸のようにすべて引き込む事ができるので、外部と一体化した開放的な空間を楽しむ事ができます。

天下の景色を独り占めすることを欲せず、広く一般に公開した長次郎翁の心意気と、庭園と一体的に建築された建物の調和と、細部まで気を配った意匠を楽しんで見て欲しいです。

寄り付き６畳間
内観(左)と花頭窓(上)

寄り付き６畳間
襖(左)と引手(上)

１０畳間
襖(左)と引手(上)

【浜座敷】

海を眺望する敷地の南端に最初に建設したのが「浜座敷」でした。崖上に建つ懸造風の離れ座敷で、入母屋と寄棟屋根をＴ字形に合わせた「撞木造り（しゅもくづくり）」と呼ばれる形式の屋根は、東大寺の三月堂をモチーフにしたと言われており、古代風の意匠の鬼瓦が据えられています。

本瓦葺きの重厚な屋根をもつ一方で、屋根勾配は緩く、垂木は吹寄せに配置され、軽妙な構成になっています。

内部は、玄関奥に寄り付き６畳間があり、１０畳間へと続き、外側に矩手に廻した開放的な縁が広がります。縁先の高欄は、３本の横連子に三組の束を立てた特徴的な意匠で、内外観を整えるアクセントとなっています。近代和風建築らしく小屋組にはトラスを用いたり、天井板には当時最新の建築資材であった合板を使用するなど、新しい技術を取り入れているところが魅力ある和の空間の構成要素になっています。

古代風の意匠の鬼瓦

東縁　天井見上げ

１０畳間　南西を見る

東縁　北東を見る

建物名称	琴ノ浦温山荘園　浜座敷
建築年	1913年（大正2年）
構造・様式	木造平屋建て・屋根入母屋造及び寄棟造　本瓦葺
所在地	和歌山県海南市船尾370
電　話	073-482-0201
Ｈ　Ｐ	http://www.onzanso.or.jp
開館時間	9：00～17：00（月曜、12月1日～2月末日休園）
アクセス	JR海南駅より和歌山方面バス10分「琴の浦」下車
備　考	庭園：国指定名勝、建造物：重要文化財、日本遺産

山﨑邸

やまさきてい

和歌山県紀の川市

【山﨑邸概要】

◇主 屋　木造二階建 屋根入母屋造 桟瓦葺(床面積･･･675㎡)
棟上　大正6年5月30日
◇北側土蔵 土蔵造二階建 屋根寄棟造 桟瓦葺(床面積･･･71㎡)
棟上　大正7年
◇南側土蔵 土蔵造二階建 屋根切妻造 桟瓦葺(床面積･･･23㎡)
◇表門 間口4.28m

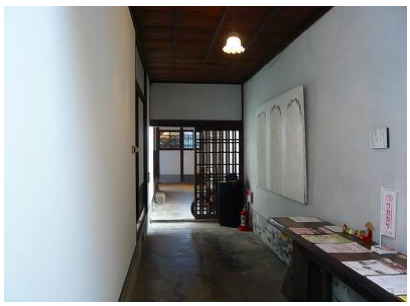
見どころ

この建物は、かつて綿ネル事業で財を成した山﨑家の豊かさを反映し、中庭に面した廊下の先にある質の高い和洋折衷の階段室や豪華絢爛な奥の大広間を筆頭に趣向を凝らした意匠が数多く散りばめられた邸宅となっている。
敷地の東側に位置し折上吹寄格天井と金箔で雲が表現された壁面で構成された大広間は、外観の厳粛さから想像しがたいほどきらびやかで、足を踏み入れるのも気が引けるほどである。
また、１階と２階に傘天井を持つ間があり、１階は和洋折衷の客間、２階は伝統的な和室となっており、各室の意匠や趣の違いは必見である。

敷地は、南北に長い長方形である。主屋は、ロの字型に中庭を挟み、東側に大広間を伸ばした平面形となっている。
1階玄関より北進すると、両側に広縁を備えた次の間と床間・違棚を備えた書院造の座敷がある。東に折れると県内でも数少ない極めて豪華な大広間がある。2階は、幅広い堅木が使用された特徴ある天井を有した座敷等、趣向を凝らした和室空間が広がっている。

内部は、伝統的な格式を現す意匠を備える一方、形式にとらわれない質の高い意匠が随所に見られ、加えて洋風の意匠も導入するなど近代建築としての特色を備える。また良材もふんだんに使用されているのも見逃せない点である。
主屋内部は改造が少なく竣工時の姿をよく遺し、敷地全体においても主屋の他、土蔵、門、土塀など屋敷構えがよく残存している。

南西に位置する、かつての勝手口は、現在営業されているcafé のエントランスとして利用されており、当時の山﨑邸の生活の場であったであろう空間を肌に感じながら、気軽に食事を楽しむことができるのも、この建物の魅力の１つである。



価値ある近代和風建築としての特色を持つ山﨑邸は、様々なイベントやcaféとして利用する事により、一層身近に和の空間を感じられる場所となっている。

建物名称	山﨑邸
建築年	1918年(大正7年)
構造・様式	木造二階建・屋根入母屋造　桟瓦葺
所在地	和歌山県紀の川市粉河853
電　話	0736-60-8233
Ｈ　Ｐ	https://hajime-cafe.jimdo.com
開館時間	café 毎週 木～土曜 11:00～15:00
アクセス	JR和歌山線粉河駅　徒歩1分
備　考	上記時間外は、お問い合わせ下さい。

蓮華定院

れんげじょういん

和歌山県高野町高野山

庫裡

蓮華定院は空海が修禅の道場として開いた日本仏教における聖地のひとつである高野山にあり建久年間（１１９０年頃）に鎌倉幕府のあつい帰依を受けていた行勝（ぎょうしょう）上人により念仏院として開創されたのが始まりである。
高野山では天保の頃に８００を超え在存していた寺院も度重なる大火や明治の廃仏毀釈により現在は１１７カ寺となるがその約半数は宿坊寺院を兼ねている。
江戸時代、幕府が諸国大名に高野山に墓を建てるよう推奨し多くの寺院はその菩提寺・所縁坊としての役を担い諸国大名との壇縁が結ばれた。　また参詣者を受け容れる施設として高野山では宿坊が発展してきたが、近年まで出身県によって利用する宿坊も決められていたという。
蓮華定院は鎌倉時代よりこの場所にあり、江戸期以降は幾度の火災にも免れ、現在にその姿を遺した宿坊寺院である。
信州真田家との所縁が深く、蓮華定院内の至るところに家紋の六文銭があしらわれ『真田坊』とも呼ばれている。

見どころ

宿坊という性質上、寺内見学は宿泊者に限るが、
真田昌幸・幸村親子が寝起きした「上段の間」と「上段次の間」に設えられた欄間は中国風で重厚さが際立つ。
鴨居は漆塗りの付鴨居で付樋端（つけひばた）と呼ばれふた間を一体として使用するという意味を持つ。　また「土室」の差し鴨居が一尺六寸を超える造りは高野山の寺院に共通する特徴の一つであるが、その大きさの必要性は謎である。昭和初期に建てられた宿坊には現在では入手不可能な高品位の材が数多く使われており、それらを探してみるのも面白い。
宿泊者は本堂にて行われる夕方の瞑想【阿息観／あそくかん】や早朝のお勤め【朝勤行】に参加する事が出来る。
特別な和空間での非日常的な体験を是非お薦めしたい。

山門を潜ると正面をずらして玄関が配された檜皮葺の庫裡が見える。庫裡には「持仏間」を中心にしてそれを囲む形で「上段の間」「上段次の間」「角の間」「稚児の間」「大広間」「土室」「茶の間」「会所」といった座敷が配されており、それぞれの襖を取り払うと大空間が生まれる高野山寺院の特徴を表す造りとなっている。庫裡の左手には江戸期に建てられた本堂と護摩堂があり、それらの建物は火災から御本尊をお守りする為に四方の壁に加え屋根の下と床下も土造りの『六方蔵』となっている。宿坊は庫裡から護摩堂の横を抜け、幾つかの中庭を囲んだ形で変形Ｔ字型に配されており、傾斜地を利用して建てられたそれらの棟は互いの目線をずらす工夫がされている。正面からはその形を窺う事は出来ないが、どの部屋に滞在しても部屋から美しい庭を愛でる事が出来る。江戸時代の襖絵がそのまま使用されている客室も数多く有り、蓮華定院の懐の深さを知る事が出来る。

庫裡 大広間から持仏間を望む

建物名称	蓮華定院
建築年	本堂・庫裡 / 万延年間（1860年頃）
構造・様式	木造
所在地	和歌山県伊都郡高野町高野山700
電　話	0736-56-2233
Ｈ　Ｐ	なし
開館時間	IN 15:00～17:00　OUT 9:00
アクセス	南海高野山ケーブル　高野山駅 下車 路線バスにて２駅目［一心口]下車 正面
備　考	見学は檀家及び宿泊者のみ